



中山 明子・西村 真紀(編)

『お母さんを診よう』

プライマリ・ケアのためのエビデンスと経験に基づいた女性診療』

医療法人社団洛和会 総長

松村理司

家庭医が産婦人科医と協力して、「お母さんをどう診るか」について、この方面に不慣れなプライマリ・ケア医用書きあげられた書物である。「内診台などがないセッティングで、プライマリ・ケア医がどう女性を支えていくかという視点」ということが、本書の「はじめに」に記されている。

私は、医師生活40年余のうち、最近の30年間を病院総合医として暮らしてきたので、プライマリ・ケア医や家庭医にはかなりの親近感を覚える。ところが、今回書評のために本書を通読したところ、新しい知識や事実を教えられることがあまりに多く、読み終わって付箋を数えると65カ所にも及んでいた。「女性をみたら妊娠を疑え」は、病院内診断推論の鍵の1つだと、研修医に口を酸っぱくして語っていたが、プライマリ・ケアの場での実践は、たしかに一層の広がりが必要である(67頁、岡田唯男先生)。

本書の長所や特徴を列記する。①書き手の家庭医が比較的若く、知識が新しく、世界を意識する傾向が強い。②産婦人科医側も、その家庭医に相対できる陣容が選ばれている。③全体としてエビデンスが豊富であり、かつその引用が自然である。④言葉の使い方が平易なので、読みやすい。本書のタイトルからして『お母さんを診よう』と一般書のようにやわらかく、文末の「私の伝え方」も具体的である。

⑤「お母さんを支える」の項目が7つあり、社会的・倫理的側面への配慮も手厚い。⑥「薬」に関する項目が6つあり、形式に流れやすい医薬品添付文書ベースの情報を正してくれる。「薬好き・薬漬け」の日本人のなかで、妊婦や授乳婦だけが過度に薬を恐れるのは忍びない。⑦特定妊婦の記載に代表されるように、弱いお母さんへの目くばりも確かである。

妊婦が風邪をひいて内科や救急にかかったら、

「産婦人科に診てもらえ」と言われた——こういった狭量さの克服が、11年前に開始された新医師臨床研修制度の要諦の1つであった。だから、産婦人科などが選択履修になった「弾力化」は後退でしかあるまい。一方で、専門医制度が充実しつつある現在、新設の総合診療専門医が家庭医療専門医だと判然とするのは、むしろ幸いかも知れない。家庭医の活躍が制度的にも期待できるからである。新旧の家庭医やプライマリ・ケア医、かかりつけ医、初期・後期研修医、そして産婦人科医、つまり多くの医師に、本書を一読することをお勧めする。



●B5 / 頁275 / 2015年 /
定価：本体3,500円＋税 /
南山堂刊